

〈共同研究〉 称名寺聖教『法事讚光明抄』について(一)

——概要と巻一翻刻——

赤松信映  
西村慶哉  
佐竹真城

概要(佐竹)

はじめに

現在、神奈川県立金沢文庫で管理される称名寺聖教のなかに、『法事讚光明抄』(目録番号・九四―四―一―四)と仮に名づけられた一書がある。四巻に分冊された本書は、古目録類にはその名を見ることはできないものの、内題と撰号より、法然門下の覚明房長西(一一八四―一二六六)による善導(六一三―六八二)撰『安樂転経行道願生淨土法事讚』(以下『法事讚』と略称)の註釈書であることが分かる。古来、長西の著作のほとんどは早くに散逸したと考えられていたため、昭和の調査で顕出されて以降、研究者の間では長西教義を窺う上で重要な典籍であると認識されていた。ところが、癖のある筆跡、所謂くずし字で記されているためか、今日まで一部を除いて翻刻が紹介

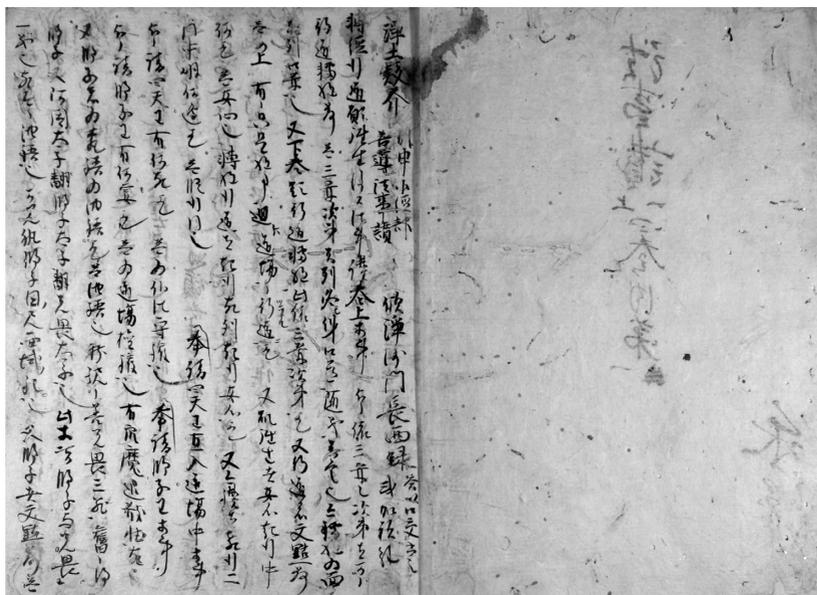
されることもなく、殆ど研究に用いられることはなかったのである。

筆者が一瞥したところ、『法事讚光明抄』は、種々の観点より重要な典籍であることは明らかである。すなわち、成立年こそ未だ詳らかでないが、文永五（一二六八）年の書写奥書を持つことから、現存最古級の『法事讚』註釈書として貴重である。また、撰者が長西であることから、長西教義、特に『法事讚』巻下に全文引用される『阿弥陀経』の理解を知ることができるほか、今日は散逸して伝わらない浄土教典籍を数多く引用している点、さらには長西と同時代に活躍した鎮西義第三祖の然阿良忠（一一九一—一二八七）への影響を看取できる点など、長西教義研究のみならず、中世浄土教研究に大きく資することができる典籍であると考えられる。

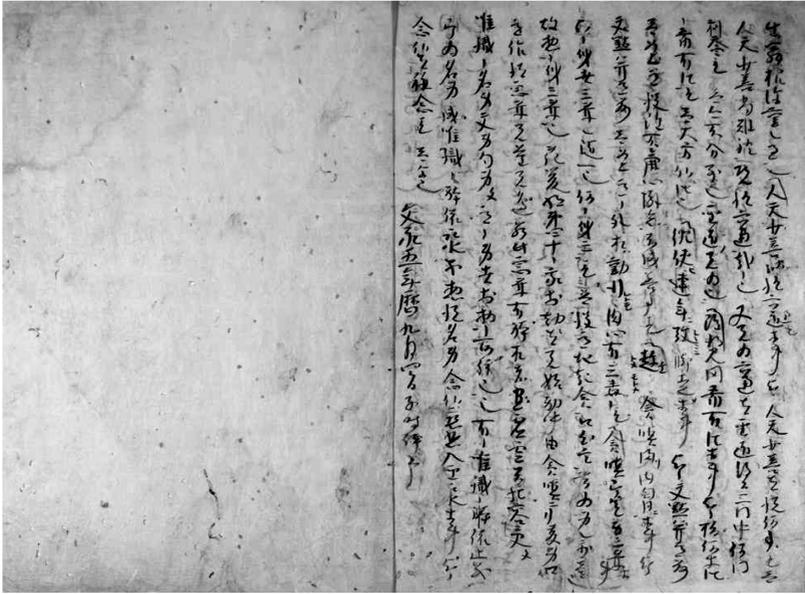
小論は、『法事讚光明抄』の概要を記し、併せて巻一の翻刻を掲載して、長西教義研究の益々の進展と、中世浄土教研究の一助となることを願うものである。なお、巻二以降についても稿を改めて翻刻を紹介する予定である。



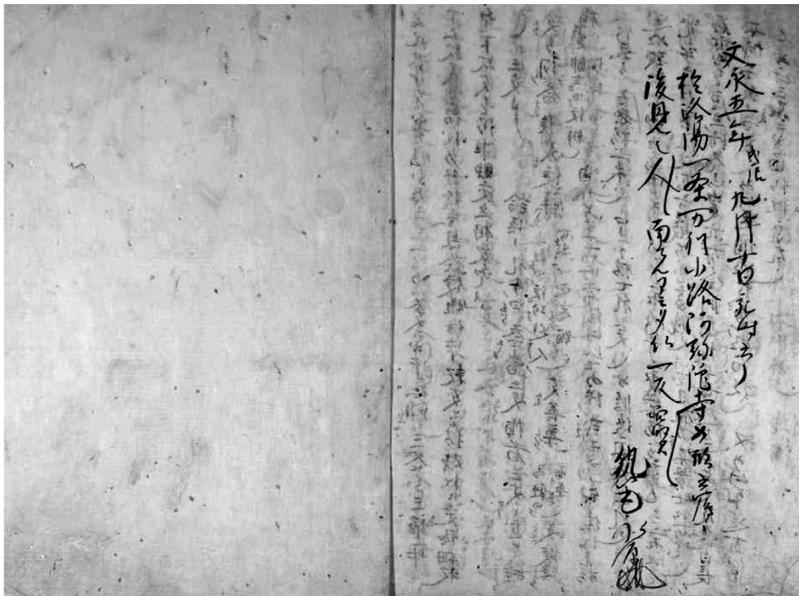
称名寺所蔵 (神奈川県立金沢文庫管理) 『法事讚光明抄』 卷一 〈表紙〉



称名寺所蔵 (神奈川県立金沢文庫管理) 『法事讚光明抄』 卷一 〈卷頭〉



称名寺所蔵（神奈川県立金沢文庫管理）『法事讃光明抄』巻三〈巻尾〉



称名寺所蔵（神奈川県立金沢文庫管理）『法事讃光明抄』巻四〈巻尾〉

一 書誌情報

まず、本書の書誌情報を整理しておきたい。便宜上、以下に表で纏めておく。

	装幀	紙数	本文	表紙・内題・撰号・奥書	書写者	備考
卷一	綴葉	一七丁	漢文(仮名交)	<p>〈表紙〉中央「法事讚」上／一 四卷内第一「 右下「湛睿」左下「永源(花押)」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥」別申小経部／善導法事 讚」</p> <p>〈撰号〉「欣浄沙門長西録」答以口受書之／或 加私解」</p>	永源	『法事讚』卷上釈
卷二	綴葉	二五丁	漢文(仮名交)	<p>〈表紙〉中央「法事讚」下／三 四卷内第二 右下「湛睿」左下「永源(花押)」</p>	永源	『法事讚』卷下釈 「仏説阿弥陀経」(八 三〇頁)、「無量諸天 大衆俱」(前同)
卷三	綴葉	二八丁	漢文(仮名交)	<p>〈奥書〉「文永五年曆九月四日子時書」</p> <p>〈表紙〉中央「法事讚四卷内第四」右下「湛 睿」左下「永源(花押)」</p>	永源	『法事讚』卷下釈 「捨彼莊嚴」(八三一 頁)、「貪瞋即是身三 業」(八四四頁)
卷四	綴葉	二二丁	漢文(仮名交)	<p>〈奥書〉「文永五年「戊辰」九月十日亥時書了 於洛陽一条万里小路阿弥陀寺如形書 写了／後見之人々南无アミタ仏一反穴 賢々々／執筆永源(花押)」</p> <p>〈表紙〉中央「法事讚四卷内第四」右下「湛 睿」左下「永源(花押)」</p>	永源	『法事讚』卷下釈 「如我今者」(八四四 頁)、「帝王人王」(八 六五頁)

なお、これらの情報から、本書の書名について一考を要するように思う。すなわち、「法事讚光明抄」という書名が、表紙・内題・奥書等の何れにも見られないのである。現状の『法事讚光明抄』という書名は、同じく金沢文庫管理の称名寺聖教であり、長西撰述書として知られる『観経疏光明抄』（目録番号：九四一六―一七）および『往生礼讚光明抄』（目録番号：九四一三）に準じたものと推察する。この二書の書名は、左表「金沢文庫所蔵長西著作書誌情報一覧表」に示したように、表紙に「光明抄」と記されることに起因するものと考えられる。そして、『観経疏光明抄』の内題には「浄土疑芥」とある点から、岸章二氏が「この内題の浄土疑芥といふのは、十八巻の『観経疏光明抄』は勿論『法事讚光明抄』、『礼讚光明抄』、『論註光明抄』等を総称するものである」と指摘するように、長西には〈浄土疑芥〉<sup>(4)</sup>という一連の著作群があり、単独では「光明抄」という呼称が用いられていたと窺うことができる。しかし、金沢文庫には同様に長西の著作として『群疑論疑芥』（目録番号：九四一五―一三）の書名で伝えられるものがある点に鑑みれば、本書も一応は『法事讚疑芥』と名付けるのが穏当であろうと考える。そのため、筆者が過去に執筆した論攷における引用や、これより以下の小論における呼称は、『法事讚疑芥』とすることを断っておきたい。

金沢文庫所蔵長西著作書誌情報一覧表

聖教名	表紙・内題・撰号・奥書
『往生礼讚光明抄』卷二・三（合冊）	〈表紙〉中央「往生礼讚〔光／明〕抄三卷内〔第二日没／第三訖後序〕」右下「湛睿」左下「永源（花押）」 〈奥書〉「文永五年八月十六日／礼讚三卷内第二」

『觀經疏光明抄』卷二断簡	<p>〈奥書〉「文永六年九月十一日酉時書了於花洛一条万里小路アミタ寺／写也後見人々念仏十反穴賢々々／執筆永源春秋廿九」</p>
同卷三	<p>〈表紙〉中央「□□疏「光／明」抄「玄七／第三」十八卷内第三「自序題門／至釈名門」」右下「湛睿」左下「永源(花押)」</p> <p>〈奥書〉「文永六年九月十日巳時書了 於一条万里小路アミタ寺写也」</p>
同卷五断簡	<p>〈奥書〉「文永五年六月十八日書了 花洛北小路書□」</p>
同卷八	<p>〈表紙〉中央「□經疏「光／明」抄「序三／第一」十八卷内第八「自証信序／至化序」」左上「觀經序分義抄第一」右下「湛睿」左下「永源(花押)」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥「別申觀經部／善導疏第二」」</p> <p>〈撰号〉「欣浄沙門 長西録「答以口受」書之／或以私解加之」</p> <p>〈奥書〉「文永六年九月廿一日戌時書了 於洛陽一条万里小路／阿弥陀院写之／執筆永源「春亀／廿九」」</p>
同卷十	<p>〈表紙〉中央「觀經疏「光／明」抄「序三／第三」十八卷内第十「自厭苦縁／至終」」左上「觀經序分義抄第三」右下「湛睿」左下「永源(花押)」</p> <p>〈奥書〉「文永五年「戊／辰」六月廿四日 執筆永源(花押)／為洛陽武者小路万利小路觀音堂書之畢」</p>
同卷十五・十六(合冊)	<p>〈表紙〉中央「□經疏「光／明」抄「散四／一二」十八卷内「第十五「自始／至就人立信」／第十六「自就行立信／至上品上生」」左上「觀經散善義抄第一第二」右下「湛睿」左下「永源(花押)」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥「別申觀經部／善導疏第四」」</p> <p>〈撰号〉「欣浄沙門長西録「答以口入書之／或以私解」」</p>

	<p>〈奥書〉「文永六年九月廿二日巳時許書了 於京洛一条万里小路アミタ寺写□／執筆 永源〔春秋廿九〕」</p>
同卷十七・十八（合冊）	<p>〈表紙〉中央「觀經疏〔光／明〕抄〔散四／三四〕十八卷内〔第七〔自上品中生／至中品下生〕／第八〔自下品上生至終也〕〕」 右下「湛睿」 左下「永源（花押）」</p> <p>〈奥書〉「文永六年九月廿四日□□於□□一条万里／小路□ミタ院写也／執筆永□（花押）」</p>
『群疑論疑芥』卷六	<p>〈表紙〉右上「群疑論第六疑芥答」 右下「称名寺」 左下「伝覚静／西観」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥〔通申説経部／群疑論第六〕」</p>
同卷七	<p>〈表紙〉中央「群疑論疑芥第七」 左下「伝覚静」 右下「金沢称名寺／西観」</p> <p>〈内題〉「浄土疑芥〔通申説経部／群疑論第七〕」</p>
同卷八	<p>〈表紙〉中央「群疑論疑芥第八」 右下「称名寺」 左下「伝覚静／西□」</p>
『浄土論注要文抄』（仮題）	<p>〈奥書〉「文永六年八月廿八日子時□□一条万里小路也」</p>

二 『法事讚疑芥』に関する先行研究

次に、本書へ言及が見られる先行研究を確認しておきたい。

・塚本善隆博士「金沢文庫所蔵浄土宗学上の未伝稀覯の鎌倉古鈔本」（『浄土学』巻五／六・五七五―五七六頁、一九

三三年 ※傍線は筆者による加筆）

(27)法事讚（光明抄）四卷内第一、第二、第四、長西撰、永源手沢、湛睿所持本

第一冊の表紙に

法事讚へ上／＼四卷内第一

その巻初には

浄土疑芥へ別申小経部／善導法事讚へ欣浄沙門長西録へ答以口受書／之或加私解へ

とあり。第四の終には

文永五年へ戊辰へ九月十日亥時書了

於洛陽一条万利小路阿弥陀寺如形書写、後見之人々南無阿弥陀佛一反穴賢穴賢、執筆永源花押

の奥書を見る。以て此書が(9)観経疏光明抄、(20)往生礼讚光明抄と共に長西の著述を永源が京都にて書写せるものなるを知る。

・岸章二氏「金沢文庫所蔵『観経疏光明抄』玄七第五(?) 同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」(『宗学研究』巻一一・一五四頁、一九三五年 ※傍線は筆者による加筆)

『観経疏光明抄』の諸問題を論じるなかで、処々に本書の書名が挙げられ、内容も概ね把握している様子が窺える。たとえば次の如くである。

又こゝに今師といふは善導を指してゐる如く、『観経疏光明抄』、『法事讚』及び『礼讚』の『光明抄』にあつては、善導呼ぶに今師若くは和尚の略称を用ひ、元祖法然上人を呼ぶに上人なる敬称を用ひてゐる。しかしながら、実際に文言を引用し、内容へ詳細に言及している箇所は見られない。

・安井広度博士『法然門下の教学』(三六頁、一九三八年「一九六八年複刊」 ※傍線は筆者による加筆)

(7)『浄土疑芥』

『群疑論疑芥』第七卷の内題に「浄土疑芥通申諸經部  
群疑論第七」と記し、『觀經疏序分義光明抄』の初に「浄土疑芥別申小經部  
善導法事讚」と記す所を見ると、彼には「浄土疑芥」と題する大部の浄土教に関する著述があつたやうに察せられる。全部で何巻あつたか解らないが、『觀經疏光明抄』十八巻のうち、『玄義分』（七巻）は序題門積名門等を存し、『序分義』（三巻）は第二巻を缺き、『定善義』（四巻）は全部を缺き、『散善義』（四巻）は大概之を伝へ、その他に、『法事讚』、『礼讚』、『論註』等の鈔を残してゐる。

- ・石田充之博士『日本浄土教の研究』（二九九—三〇〇頁、一九五二年）※傍線および山括弧内は筆者による加筆と註
- (5)法事讚光明抄（一、二、四の三巻三冊現存）（金沢文庫蔵）……一連の「浄土疑芥へ※」なしは原文ママと内題する議義録と推測されるもので、門弟の私解等が加えられているが、大体その著と推定される。
- ・石田充之博士『法然上人門下の浄土教学の研究』巻下  
（七八頁、一九七九年）※傍線および山括弧内は筆者による加筆と註

(5)法事讚光明抄（一、二、四の三巻三冊現存）永源手沢本湛睿所持へ※「金沢文庫蔵」の脚註あり……一連の『浄土疑芥』と内題する長西の議義録と推定されるもので、門弟の私解等が加えられているのであつて、大體長西師の思想内容を伝える著述であると思惟して宜しいであろう。但し、書中門弟の私解が多く加えられておつて時に長西の説か門弟の説か判別に苦しむ点がある故、その辺の判別に注意すべきであろう。

- ・『浄土宗大辞典』（巻三・二八四頁、一九八〇年）※傍線は筆者による加筆
- ほうじさんのまつしよ【法事讚の末書】……九品寺流では長西撰・永源写の「光明抄」四巻（第三巻欠）があ

る。本書は覚明房長西が『法事讚』を講じた稿本を、一二六八年(文永五)永源が京都是一条万里小路阿弥陀院において書写したものである。

・吉田淳雄氏「長西の著作について」(『仏教論叢』巻四四・九七頁、二〇〇〇年 ※傍線は筆者による加筆)

法事讚光明抄は、従来は第一・二・四巻のみ現存とされてきたが、実は四巻全てが現存する。ただし巻二の巻末と巻三の巻初は欠落している。巻一は上巻の積、残る巻二〜四は下巻の積である。

外題は

法事讚 へ上／一 四巻内第一

法事讚 へ下／三 四巻内第二

などとなっております、また巻一には

浄土疑芥へ別申小経部／善導法事讚 欣浄沙門長西録 へ答以口受書之／或加私解

との内題を有する。

・『新纂浄土宗大辞典』(一三二八頁、二〇一六年 執筆・吉田淳雄氏 ※傍線は筆者による加筆)

法事讚光明抄 四巻。長西撰。金沢文庫保管。善導『法事讚』の註釈書。巻二の巻末と巻三の巻初は欠落するものの四巻全てが現存する。巻一は上巻の、巻二以降は下巻の積である。昭和初期に金沢文庫より発見された典籍の一つで、諸行本願義の立場からの『法事讚』ひいては『阿弥陀経』理解を窺うことのできる貴重な資料である。

如上、本書の存在および貴重性・重要性には言及しながらも、外面的な情報の紹介の域を出るものではなく、内容にまで踏み込んだ論攷は確認できない。

### 三 『法事讚疑芥』の内容

既に述べたように、『法事讚疑芥』は『法事讚』の註釈書である。具体的には『法事讚』の本文を「●●等事」と細分し、多くの経論釈を引用しながら撰者の理解が示されている。また、『法事讚』巻下には『阿弥陀経』が全文引用されることから、長西における『阿弥陀経』理解が窺える点でも注目に値する。さらには、『阿弥陀経』註釈にあたって多くの文献を引用するが、そのなかには今日では散逸して伝存しない典籍(5)が含まれていることも、本書の価値を大きく高めるものと考ええる。以下、本書における注目すべき説示を数例紹介したい。

#### 例①

疑云、不<sup>セ</sup>論<sup>ニ</sup>念<sup>ト</sup>仏<sup>ト</sup>諸<sup>ト</sup>行<sup>ト</sup>。ミタ<sup>ノ</sup>光明<sup>ハ</sup>撰<sup>ニ</sup>往生<sup>人</sup>。歟。答。撰<sup>取</sup>必<sup>可</sup>限<sup>ニ</sup>念<sup>仏</sup>也。

(金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・三丁左)(6)

阿弥陀仏の光明は、念仏と諸行とを分け隔てなく往生人を撰するのかという問いに対し、撰取は必ず念仏に限ると答えている。

#### 例②

又雑善<sup>ト</sup>者<sup>ハ</sup>何等<sup>歟</sup>。答。念<sup>仏</sup>外<sup>ノ</sup>諸<sup>行</sup>也。此<sup>即</sup>正<sup>雑</sup>二<sup>行</sup>中<sup>ノ</sup>雑<sup>行</sup>也。

(金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・二四丁左)

雑善とは念仏以外の諸行であり、正雑二行でいえば雑行であると定義している。

#### 例③

又雑善<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>難<sup>キ</sup>生<sup>シ</sup>歟。答。疎<sup>ナ</sup>遠<sup>ナル</sup>故<sup>也</sup>。疎<sup>ナ</sup>遠<sup>ナル</sup>故<sup>力</sup>弱<sup>キ</sup>也。故<sup>般</sup>舟<sup>讚</sup>云、万<sup>行</sup>俱<sup>廻</sup>皆<sup>得</sup>往<sup>ニ</sup>、念<sup>仏</sup>一<sup>行</sup>最<sup>為</sup>尊<sup>也</sup>。

廻<sup>生</sup>雑<sup>善</sup>恐<sup>ク</sup>力<sup>弱</sup>、无<sup>シ</sup>過<sup>ト</sup>一<sup>日</sup>七<sup>日</sup>念<sup>文</sup>。

(金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・二四丁左)

念仏以外の諸行である雑善（雑行）は疎遠であり力が弱いから往生し難いことを、『般舟讚』を文証として述べている。

例④

以ニ真觀ノ三縁之積ニ准シテ彼案レ之、今人能念仏々還念者、散心也。此得ニ三業。如ニ真身觀ノ口常称念等。此即念仏三昧為宗之意也。専心想仏々知人者、此得ニ意業一辺。如ニ真身觀ノ衆生憶念仏等。此即觀仏三昧為宗意也。意云、本願乃至十念々仏中亘ニ三業ニ有ニ定散念仏一積頭也。余処称我名号等者、此三業中散称本願正意。往生正業偏在レ之。故積ニ肝要也。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、卷一・一〇丁左）

本願文の「乃至十念」は三業にわたるもので定散両義を有した念仏であるが、そのなかでも散心の称名念仏が本願の正意・往生の正業であることを明かしている。

例⑤

尋云、執持名号者、觀称中何歟。答、今積雖不レ云ニ称名ニ玄義別時門積ニ一日七日称ニ仏之名、礼讚後序積ニ一心称レ仏不レ乱。又積ニ十声ニ十声又積ニ若称レ仏往生者云々。諸師皆以如レ此也。難云、今聞説アミタ仏者、指下上光明寿命无量故名ニアミタ仏之説歟。若爾者執持名号者、聞ニ觀念之境。謂可レ觀ニ光明寿命等ニ故、何云ニ称名ニ歟。又付ニ經之文言、執持二字ニ必聞ニ称名、如何。答、難勢実□爾也。但論感ノ性相、云ニ名句文身依レ声仮立ニ故名号必可ニ口唱レ之也。雖レ爾豎著共不レ可ニ一偏ニ經論文言多含、付ニ執持名号ニ可レ有三業之行也。是以諸師解釈刃々也。

（金沢文庫蔵文永五年書写本、卷三・二二丁左）

『阿弥陀經』の「執持名号」について、表面上は称名の義を取るものの、観念的に解釈していく義を完全否定せず、經論の文言は多岐にわたり、「執持名号」においても三業の行があるのだから、一つの見解に執着すべきでは

ないと述べている。

長西教義は一般に「諸行本願義」と評され、法然聖人門流の中では邪義・異端の人師として知られているが、その評価が一概に首肯できないことは既に別稿にて指摘した<sup>(8)</sup>。その根拠の一端を担ったのが、例①～④等に一貫して見られる念仏Ⅱ勝、諸行Ⅱ劣の説示である。殊に例④の一文で明言されているように、称名念仏を本願の正意と位置づけている点は看過してはならないだろう。ただし、その念仏理解に観念的要素を多分に含んでいることは注意が必要である。すなわち、称名ほど高い位置付けではないものの、同じ念仏である以上、観念にも同等の機能を認めているのである。その特徴が如実に現れているのが例⑤である。ここでは「執持名号」を称名の義で取りながらも、経論の説示および行が三業に亘ることを理由に、観念的理解を否定はしない。このように、三業に亘る念仏理解を見せる点は長西教義の特徴と言つて良く、本書にもその特徴が顕現していると見ることができ<sup>(9)</sup>る。

#### 四 内題割註の「私解」について

『法事讚疑芥』は、前述の如く長西撰述書と考えられる。その理由の一つが、巻一内題下に見られる「欣浄沙門長西録」との撰号であり、これが長西撰述書として著名な『浄土依憑経論章疏目錄』、いわゆる『長西録』に用いられる表記と一致することによる<sup>(10)</sup>。また、前に示した如く、本書に示される思想内容も、長西教義と一致するものと認められる。

さて、現存する〈浄土疑芥〉では撰号を有している場合、直下に割註が施され、そのなかに「私解」の一語が確認できる。『法事讚疑芥』も例外なく、撰号下の割註に「私解」の一語が見られる。実際、『法事讚疑芥』を含む〈浄土疑芥〉の本文中には、処々に「私云」として私釈を述べる箇所が散見されることから、「私解」がこの私釈

を意味していることは間違いないが、問題は「私」が誰を指すのかということである。この私積について、岸章二氏は種々の観点から検討を加えた上で「幾多の『光明抄』は思想として長西の口述を弟子阿弥陀房が受けこれに私解を加へたものといふことになり、……私云といふ私料簡の一段は細註の私解に依じて阿弥陀房の主張となる」(前掲書一七一頁)と示唆し、安井博士は「門弟の阿弥陀房が師長西の説を録し……自説を加へたものだと思ふ」(前掲書三七頁)と指摘している。他の先行研究もこの説に異を唱へたものはなく、(浄土疑芥)の私解||阿弥陀房の説と見るのが今日の定説となっている。

なお、「私云」として述べる説示には、直前まで述べてきた義、すなわち長西義に対して、「不爾」と否定的な見解も多く見られるなど、阿弥陀房の教学を知る上でも、長西および門弟との関係を窺う上でも、大変に意義深い。周知のように、九品寺流は早くに相伝を断絶することとなるのであるが、筆者は長西教義と長西門弟教義との乖離が一因にあると推察するため、<sup>①</sup>流義廃退の理由を探る上でも貴重な史料になり得ると考える。

## 五 良忠への影響

長西と良忠が直接対峙したか否かは定かでないが、活躍した時期は重なるところが多くある。興味深いのは、良忠門弟の良心(一二六二—一三三三)が著した『授手印決答受決鈔』に、

伝通記<sup>レ</sup>筆執<sup>者</sup>性心也。余人談<sup>シ</sup>長西<sup>等</sup>余流<sup>抄</sup>物、及引<sup>ニ</sup>要要<sup>ノ</sup>經論<sup>章</sup>疏<sup>文</sup>。

(『浄全』巻一〇・八八頁上—下)

と記される点で、良忠が『観經疏伝通記』を執筆するにあたっては、長西等の浄土異流の著作を参照していたと伝えられるのである。実際、良忠を含めた鎮西義の人師の著作には、長西および長西門流への批判的言及が多く見られるが、良忠の思想基盤には長西教義があり、良忠と長西は共通する面を有するとの指摘もある。<sup>②</sup>上記指摘は善導

『観経疏』理解に限定した見解であるが、『法事讚』理解においても長西から良忠への影響を看取できる。以下に一例を示してみよう（対照の便宜上、訓点は省略し、適宜傍線・括弧数字等を付した）。

【長西撰『法事讚疑芥』<sup>13</sup>】

尋云神光者意如何答如来大般涅槃光入衆生毛孔内薰密益故漸々善心增長也弘法大師云仏光外射真如内薰<sup>文</sup>

例①

当該箇所は、『法事讚』巻上「神光」（『聖典全書』巻一・八〇二頁）の解釈箇所である。前半の表現は両者両様の表現をとるが、注目すべきは後半の引文である。『法事讚疑芥』は「弘法大師」、『法事讚私記』は「高野大師」と、引用元の呼称および「薰」と「熏」という漢字の相異はあるものの、前者は同一人物を指し、後者は音通と考えられるため、引文自体は全く共通していると言える。この点、同一箇所を註釈しているのであるから、文証として用いる典籍・文言が共通することは珍しいことではない。ところが、ここでの引文は空海（七七四―八三五）著作中に完全一致する文言はなく、『秘藏宝鑰』巻上「是故本覚内薰仏光外射」（『大正蔵』巻七七・三六四頁上）の取意文であると推定できるのであるが、同取意文は、管見の限り後世の鎮西義系典籍を除けば、『法事讚私記』にしか見られないのである。したがって、良忠は『法事讚疑芥』から孫引きしたものと考えることができよう。

例②

【長西撰『法事讚疑芥』<sup>15</sup>】

三身化用<sup>至乃</sup>法体无殊等事 疑云以法身属化用歟答不爾  
修性顕得一切仏皆具三身雖化用云三身猶□也報応二身

【良忠撰『法事讚私記』<sup>16</sup>】

三身化用等者諸仏如来皆具三身三身居三土於中自性自受之  
二身者無利生義故以導群生者当佗受用变化身徳仏無別等

化用推功法□用也但真言意四身共云□也二教論云此四

具三身故云無殊所証平等故皆有慈悲方便利生亦同故云得悟

種身具横豎二義横則自利豎則利他深義更聞<sup>文</sup>

又二教論云此四種身具横豎二義横即自利豎即利他深義更聞<sup>上</sup>

当該箇所は、『法事讚』卷上「三身」(『聖典全書』卷一・八〇七頁)に關連して、仏身について解釈する箇所である。ここでも前半は両者両様の解釈を施すが、後半で空海撰『弁頭密二教論』(以下「二教論」と略称)を引用する点は一貫している。その引用文は、『二教論』卷下「此四種身具豎横二義。横則自利豎則利他。深義更聞」(『大正藏』卷七七・三八〇頁上)がソースであると考えられるが、原文で「豎横二義」とあるのを「横豎二義」と入れ替える点、そして原文では最後が「問」であるのに「聞」とする点から、長西の独自の引用であると考えられる。<sup>(17)</sup>これらの特徴を有する特殊な引文でありながら、見事なまでに一致していることから、当該引文も『法事讚疑芥』からの孫引きと考えてよいだろう。

例③

【長西撰『法事讚疑芥』<sup>(18)</sup>】

三十六王地獄典領等事 疑云卅六王者何等歟答卅六禽

三十六王者指三十六部歟如觀念門記有云此指三十六禽歟天

歟天廿八宿地卅六神云爾者地獄有卅六王歟浄土三昧経

有二十八宿地有三十六神可檢准頂経浄土三昧経八陽経

八揚経

【良忠撰『法事讚私記』<sup>(19)</sup>】

当該箇所は、『法事讚』卷上「三十六王」(『聖典全書』卷一・八二〇頁)について述べる箇所である。ここで良忠は自説を述べた後、「有云」として一義を紹介しているが、対照すれば明らかかなように、その義は『法事讚疑芥』と概ね一致していることが分かる。若干の相異点はあるものの、同義は他師に確認できないことから、書写流伝の間に脱落したものと推察でき、他の一致箇所と複合的に勘案して、良忠が『法事讚疑芥』を参照していたことが窺

えよう。

例④

【長西撰『法事讚疑芥』<sup>(20)</sup>】

尋云今經翻訳之時代如何答有云此經有三代訳一アミタ経亦云无量

寿小経廬山集云小无量寿経如来滅後一三百五十年晋安帝世来天竺龜茲国三藏

法師鳩摩羅什婆余云童寿弘始四年辛丑二月八日第一出具在別錄二

小无量寿経或无小字一云アミタ経如来滅後一千三百八十余年宋文帝世中

天竺沙門求那跋羅宋言功德賢考違年第二出具在別錄三称讚浄土

仏撰受経一卷如来滅後一千五百九十九年大唐高宋世沙門釈玄

奘永徽元年庚戌正月一日於大慈恩寺翻経院第三出具在別錄今經慈恩

通賛疏第一云翻訳時人者此経前後有其四訳一秦弘始四年二月

八日羅什訳一名小无量寿経二字元嘉年中求那跋陀羅訳四紙三

求徽六年大唐三藏於慈恩寺訳称讚浄土仏撰受経十紙四後秦又

訳出アミタ経偈頌一紙而失訳主今所解者即是秦羅什法師所訳

文仁岳新疏上云此経凡有四訳……雖四本梵文乃同今檢第二訳

未見其本若偈頌者与此全別不应指同梵文文

此経又明翻訳時代者

【良忠撰『法事讚私記』<sup>(21)</sup>】

慈恩

通賛疏一云翻訳時人者此経前後有其四訳一秦弘始四年二月八日羅什訳名小無量寿経二字元嘉年中求那跋陀羅訳四紙三永徽六年大唐三藏於慈恩寺訳名称讚浄土仏撰受経十紙四後秦又訳出阿弥陀偈頌一紙而失訳主今所訳経者即是秦羅什法師所訳上仁岳新疏上云此経凡有四訳至乃雖有四本梵言乃同今檢第二訳未見其本若偈頌者与此全別不应指同梵文上

当該箇所は、『阿弥陀経』諸本の翻訳者および翻訳時代を論じる箇所である。『法事讚疑芥』は、後に文証として引用する内容を先んじて自説として述べている分文量が多くなっているのに対し、『法事讚私記』では引用文のみとすることでシンプルな文段としている点は異なる。しかし、両者が文証とする引用文が共通し、その順番・引用範囲・中略箇所まで一致している点は看過できない。多少の文言の相異はあるが、『法事讚疑芥』では単純な写誤と考えられるものが殆どであることや、『仁岳新疏』の「四本梵文」の「文」の右傍には「言敷」と註記されているなど、基本的に一致すると考えて大過ないだろう。訳者・時代を論じ、文証として『通贊疏』や『仁岳新疏』を引用することが当時の『阿弥陀経』註釈書におけるスタンダードであった可能性も考慮すべきであるが、管見の限り、現存典籍では『法事讚疑芥』・『法事讚私記』のみに見られる論法であることから、他の一致例も併せて勘案すれば、孫引きの可能性は高いと考えられよう。

例⑤

【長西撰『法事讚疑芥』<sup>(22)</sup>】

不可以少善根<sup>乃至</sup>乃生彼国等事 疑云少善者文点如何如上

(1) 円云舍利弗下二……得生悉如文……

尋云諸師如何釈之歟答

(2) 天台義記云問前云不可……即当得去(3)<sup>信同之</sup>

(4) 肇公義疏云舍利弗不可……願必得往生<sup>文</sup>

(5) 慈恩同之

(6) 慈藏ミタ経記云初小因不得……如経論説也

【良忠撰『法事讚私記』<sup>(23)</sup>】

問少善根者何善根耶答其解多端先出異解後述自義先出異

解者

(4) 肇公義疏云舍利弗不可……願必得往生<sup>上</sup>

(5) 慈恩同之

(2) 天台義記云問前云不可……即当得去也<sup>上</sup>

(1) 孤山云舍利弗下二……得生悉如文<sup>上</sup>

(6) 慈藏弥陀経記云初少因不得……如経論説也<sup>上</sup>

(7) 元照云如来欲明持……本相伝訛脱<sup>文</sup>

(8) 希深義解同之

(9) 要決云夫論善根多……定判為少善<sup>文</sup>

(10) 春秋晏子曰以一心可事□君以百心不可事一君

(11) 晧云顯示大菩提……等無譏嫌名<sup>文</sup>

(12) 測云此即第二讚……土故不相違<sup>文</sup>

尋云付不可以少善根等之文諸師作異解、有何由歟、答於所釈  
經文分明諸師全不異解、文相幽玄異解不同也、而今雖說少善  
不生未明少善之相、而今案此文意有其二意、一次下說執持名  
号得生、故知攝名号外自余諸善云少善不生歟、二說一心不乱  
即得往生、故知設雖執持名号非一心不乱云少善不生歟、有此  
道理、故諸師各異解也、又雖余行一心不乱行之即得往生也、何  
云少善不生歟、又雖名号非一心不乱不可生、何云即得往生歟、  
故知經意大約安心厚薄說少善不生也、然則人師解积多分約  
安心淺深积少善不生之義也

当該箇所は、『阿弥陀經』のいわゆる嫌貶開示の积である。既に指摘されるように、諸師の解釈を並べるなかで  
人師の呼称や引用順などはわずかに異なるが、その引用文に着目すると、引用する人師や引文の範圍が符合し、  
「同之」とする箇所まで一致している。<sup>(24)</sup>このことから、良忠が『法事讚疑芥』を下敷きにして、『法事讚私記』を撰

(9) 要決云夫論善根多……定判為少善<sup>上</sup>

(11) 海東云顯示大菩提……等無譏嫌名<sup>上</sup>

次述自義者隨緣雜善名為少善、七日念仏云多善又靈芝所  
解似類今家

(7) 彼疏云如来欲明持……本相伝訛脱<sup>上</sup>

(8) 希深義解同之

問諸師異解有何由耶、答或人云所訳經文分明時諸師不作異  
解、文相幽玄時異解不同、而今雖說少善不生未明少善行相、今  
案此文有其二意、一次下說執持名号得生、故知指名号外自余  
諸善名少善也、二說一心不乱即得往生、故知設雖執持名号非  
一心不乱云少善不生有此理、故諸師異解、設雖余行若一心不  
乱即得往生、設雖名号若非一心何得往生、故知經意大約安心  
厚薄說少善不生也、然則諸師解积多約安心淺深积少善不生義  
也

今云此義有二過失一違經文二乖宗義

述していることが窺えよう。<sup>(25)</sup> さらに注目すべきは、両者とも引文の直後に「諸師はどのような理由から異解を為しているのか」(部)との問いを設けている箇所である。長西はここで自義を述べていくのに対し、良忠は「或人」(部)の説を引用するのであるが、その説示はまさに長西義そのものであることがわかる(部)。<sup>(26)</sup> そして、長西義を一通り引用した後、「此義有二過失」(部)として、二つの観点から批判を加えていくのである。<sup>(26)</sup>

如上、紙数の都合で数例を挙げるに留まったが、引用文の孫引きや本文引用という観点より、良忠撰『法事讚私記』は、長西撰『法事讚疑芥』の影響下に著されたものと見る事ができよう。『法事讚疑芥』と『法事讚私記』および長西と良忠の関係について詳細に検討することは、今後の課題としたい。

## 小 結

以上、『法事讚疑芥』における書誌情報や内容の一端を紹介してきた。現状での見解をまとめれば、以下の通りである。

- ① 『法事讚』註釈書として最古級に位置し、多くの散逸文献の引用が確認できることから、純粋に史料として重要である。
- ② 特に、撰者が長西である点から大変に貴重であり、不明な点の多い長西教義を窺う上で重要である。
- ③ 門弟の阿弥陀房の見解も見られるが、必ずしも長西と見解が一致していないことから、長西門流の研究にも大きな役割を果たすことが期待される。
- ④ 良忠との関連を指摘できることから、長西と良忠、ひいては長西門流と鎮西義との関わり、さらに言えば中世浄土教を研究する上で大変に示唆に富んだ史料である。

如上の点より、『法事讚疑芥』は非常に高い価値を有しており、長西教義研究をはじめ、中世浄土教研究において大きな役割を果たす可能性を持つ典籍であると考ええる。

なお、これらは『法事讚疑芥』のみならず、〈浄土疑芥〉に共通して言えることであり、今後も鋭意翻刻の紹介を進めていく予定である。

## 註

(1) 本表における「装幀」・「紙数」については、『称名寺聖教目録』(文化庁文化財部美術学芸課発行、二〇〇六年)一〇五頁による。本目録の紙数は表紙・裏表紙も含めたものと推察され、本文に該当する箇所はそれぞれ二丁少なくなる。なお、「」内は細字を意味し、／は改行位置を示している。

(2) 便宜上、所釈の範囲を示し、『浄土真宗聖典全書』(以下「聖典全書」と略称)巻一所収『法事讚』での該当頁を記した。なお、所釈の範囲は本文に「●●等事」とある見出語に拠っているが、「等」とあるように、必ずしも見出語以下の『法事讚』原文の註釈がないわけではないことを断っておく。

(3) 岸章二稿「金沢文庫所蔵『観経疏光明抄』玄七第五(?) 同序三第一の本文及びその解説と光明抄研究の一問題」(『宗学研究』巻一一・一五二頁、一九三五年)

(4) 筆者は、長西撰述の『往生礼讚光明抄』・『観経疏光明抄』・『法事讚疑芥』・『群疑論疑芥』・『浄土論注要文抄』を総称した表記として、〈浄土疑芥〉を用いることを断っておく。

(5) 管見の限り、以下の典籍を挙げることができる。

- ① 永観撰『阿弥陀経要記』、② 僧肇撰『阿弥陀経義疏』(参考:『仏解』巻一・四二頁二段)、③ 円測撰『阿弥陀経疏』(参考:『仏解』巻一・四六頁四段)、④ 玄一撰『阿弥陀経記』(参考:『仏解』巻一・四一頁三段)、⑤ 用欽撰『阿弥陀経疏超玄記』(参考:『仏解』巻一・四八頁三段)、⑥ 仁岳撰『阿弥陀経疏』(参考:『仏解』巻一・四七頁二段)、⑦ 慈蔵撰『阿弥陀経義記』(参考:『仏解』巻一・四二頁一段)など

なお、①に関しては、本書に見られる逸文および他の典籍に見られる逸文を整理して、従来知られていなかった

- 特徴を論じた上で、先行研究に加上する形で逸文を補遺して発表した(拙稿「永観撰『阿弥陀経要記』の特徴について―附『阿弥陀経要記』逸文補遺―」、『真宗研究』巻六二、二〇一八年)。
- (6) 小論中の引用文では、旧字は新字に、異体字は通行体にそれぞれ改めた上で、訓点は筆者の訓みにしたがって私に付した。また、隠滅箇所は文字数分の「□」で表記した。
- (7) 「堅」は「堅」の写誤か? 「堅」では意味が通らないように思う。
- (8) 拙稿「長西の「諸行本願義」考―「浄土疑芥」を通しての再検討―」(『宗学院論集』巻八八、二〇一六年)。
- (9) 〈浄土疑芥〉では他に、『散善義光明抄』(『宗学研究』巻一六・一五五頁)・『浄土論注要文抄』金沢文庫蔵文永六年書写卷子本、巻下・六九一―六九四行)・『往生礼讚光明抄』(金沢文庫蔵文永五年書写本、巻二/三・二五丁左―二六丁右)に三業の念仏についての説示を窺うことができる。
- (10) 『仏全』巻一・三三七頁。
- (11) 既に、拙稿「長西教学に関する一試論―法然聖人門流における邪義・異端評価の成立背景―」(『中央仏教学院紀要』巻二八・五〇頁、二〇一七年)において、可能性を示唆した。本件については、後日に稿を改めて詳細に論じてみたい。
- (12) 広川堯敏稿「金沢文庫本『観経疏聞書』について」(『印度学仏教学研究』巻三七―一・一九八八年)・同「金沢文庫本『観経疏聞書』と『光明抄』―良忠教学の思想基盤―」(『浄土宗学研究』巻一八・一九九二年)・同「良忠と諸行本願義」(『印度学仏教学研究』巻四二―二・一九九四年)・同「初期良忠教学の形成過程―金沢文庫本『観経疏玄義分聞書』第一を中心として―」(『浄土宗学研究』巻二三・一九九七年)を参照。広川博士はこれらの論考のなかで、総じて長西と良忠は対立する面と共通する面との両面を合わせ持っていることを論じている。
- (13) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・二丁左。
- (14) 巻上、『浄全』巻四・三五頁上。
- (15) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・五丁右。
- (16) 巻上、『浄全』巻四・四〇頁上。
- (17) 『定本弘法大師全集』巻三・一〇四頁、『弘法大師全集』(増補三版)巻三・五〇〇頁も確認したが、当見解に影響

響する異本情報等は確認できなかった。

(18) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻一・一二丁左。

(19) 巻上、『浄全』巻四・四七頁上一下。

(20) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻二・二丁右一左。

(21) 巻中、『浄全』巻四・五三頁上一下。

(22) 金沢文庫蔵文永五年書写本、巻三・一九丁左―二二丁左。

(23) 『浄全』巻四・七三頁上―七四頁下。

(24) 紙数の都合で『法事讚疑芥』・『法事讚私記』とも私に本文を大幅に省略して引用した。すなわち「……」は引用元では本文があるものを省略していることを断っておく。

(25) 千葉隆誓氏は、『法事讚疑芥』と『法事讚私記』の引用文を比較して相違点と共通点を挙げ、その共通点として①引用される人師が共通すること、②引用順は異なるが引用文の始まりと終わりとは一致していることを指摘している。「真門釈所引の元照『阿弥陀経義疏』」引意についての一考察、『宗学院論集』巻八八・二〇一六年）ただし千葉氏は「慈恩同之」なども引用人師の共通点として挙げているが、そうであるならば『法事讚疑芥』の「信同之」（源信『阿弥陀経略記』も同義である）との記述も考慮されなければならない。ところが、『法事讚私記』には源信への言及はなく、(10)『晏子春秋』・(12)の円測撰『阿弥陀経疏』も長西のみが引用する文であるから、厳密には完全一致とは言えない。とはいえ、その点を考慮しても、千葉氏の指摘には筆者も基本的に同意するものであり、後半の批判内容の一致がそれを証明しているといえるだろう。

(26) その批判の具体的な内容は次の通りである。

先違ニ経文ニ者、少善行相雖不説カテ、大善行体分明顯説。所謂上嫌ニ少善不生、下云ニ執持名号、就此名号即説ニ一心不乱。文相分明、身何云文幽、況一本経云ニ専称名号是多善等、何以ニ名号還ニ属ニ少善ニ。乖ニ宗義ニ者、今家所判異ニ余師釈、或以ニ余善嫌ニ疎雜等、或以ニ定散比ニ校名号判ニ付属義。此乃独局ニ名号為ニ本願行ニ故也。処処解釈皆述ニ此義。實是今家為ニ弥陀広迹、再任ニ本地誓願顯示ニ宗綱要。綺（※緯）非ニ聊爾、何忽ニ緒之。凡立宗之法就ニ一師所解猶会ニ経論文、況余師釈耶。如彼台宗ニ者、天台大師為ニ薬王垂

迹<sup>ニ</sup>、顯<sup>ス</sup>靈<sup>ニ</sup>山<sup>ノ</sup>聞<sup>フ</sup>。故<sup>ニ</sup>章<sup>ハ</sup>安<sup>テ</sup>等<sup>ハ</sup>標<sup>シ</sup>諸<sup>ノ</sup>師<sup>ヲ</sup>異<sup>ニ</sup>解<sup>ス</sup>。駭<sup>ニ</sup>彼<sup>ノ</sup>非<sup>レ</sup>。円<sup>ニ</sup>。縱<sup>ヒ</sup>雖<sup>モ</sup>一<sup>ノ</sup>宗<sup>ノ</sup>内<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>末<sup>ノ</sup>師<sup>者</sup>順<sup>ニ</sup>理<sup>之</sup>時<sup>選</sup>類<sup>ニ</sup>金<sup>ノ</sup>宝<sup>一</sup>。違<sup>レ</sup>理<sup>之</sup>時<sup>嫌</sup>同<sup>ニ</sup>瓦<sup>ノ</sup>礫<sup>ニ</sup>。諸<sup>ノ</sup>宗<sup>並</sup>如<sup>ク</sup>(※)此<sup>レ</sup>。今<sup>亦</sup>可<sup>シ</sup>然<sup>ル</sup>。何<sup>会</sup>ニ當<sup>リ</sup>讚<sup>文</sup>ニ還<sup>ル</sup>。依<sup>テ</sup>余<sup>ノ</sup>師<sup>解</sup>。先<sup>師</sup>殊<sup>痛</sup>之<sup>ヲ</sup>。諸<sup>ノ</sup>師<sup>若</sup>順<sup>レ</sup>今<sup>同</sup>可<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>。若<sup>違</sup>レ今<sup>何</sup>助<sup>ニ</sup>彼<sup>ノ</sup>義<sup>ヲ</sup>。請<sup>フ</sup>末<sup>学</sup>再<sup>察</sup>。糺<sup>ニ</sup>義<sup>是</sup>非<sup>一</sup>矣。

(『浄全』卷四・七四頁下―七五頁上 ※は『浄全』頭註にもとづく)

すなわち、「違經文」での主張は、「少善の行相こそ説かれていないが、大善の行体は明らかに説かれている。加えて、前に少善不生と嫌い、後には執持名号と述べて、さらにはその執持名号について一心不乱と説かれる。となれば文の上に明らかに名号が少善でない旨が見えているのに、どうして文幽(文の奥深いところ)というのか。ましてや『阿弥陀經』の別本(異本の一本)には、専称名号是多善等と説かれているのに、どうして名号を少善に属させようとするのか」というものである。次に「乖宗義」での主張は、「法然義は他の人師と異なり、余善を粗雑と嫌い、名号だけが本願の行とするものである。弥陀の応迹である法然義をいるがせにするのか。宗を立てるにあたっては、一師の理解によりながら経論の文・諸師の解釈を会通していくものである。天台宗では、天台大師は薬王の垂迹と考え、章安大師は諸師の異解を標榜して円教ではないことを明らかにした。たとえ天台宗内の人師であろうと、道理に順していれば金宝とし、道理に違うならば瓦礫と同じとして嫌うものである。諸師はみな天台宗の如く考えるのであって、浄土宗もまた同様である。それなのにどうして当讚文を会通して他師の解釈に依拠するか」というものである。

### 【付記】

小論は、本願寺派教学助成財団の平成二十九年年度助成による成果の一部である。また、小論の執筆にあたり、称名寺御住職の須方隆證師、ならびに金沢文庫御当局には格別の御高配を賜りました。衷心より感謝申し上げます。

なお、小論は、左記のメンバーで開催している研究会における成果の一部である。

赤松信映（浄土真宗本願寺派宗学院研究員） 佐竹真城（浄土真宗本願寺派総合研究所研究員）

西村慶哉（浄土真宗本願寺派総合研究所研究助手） 井上慶淳（龍谷大学大学院博士後期課程）

キーワード 覚明房長西 九品寺流 浄土疑芥 法事讚疑芥 諸行本願義 良忠 法事讚私記 金沢文庫

## 『法事讚疑芥』巻一翻刻

(赤松・佐竹・西村・井上)

### 【凡例】

- ①本翻刻は、称名寺聖教『法事讚光明抄』の巻一(94函4—1)を翻刻したものである。
- ②漢字は新字の通行体に統一し、略字(合字)は正字に戻して翻刻した。
- ③各丁数はへゝで括って示し、行取りは原本に準じて行頭に行数を記した。
- ④訓点・合符は原本に付されている通り翻刻したが、スペースに関しては必ずしも原本にはよらず、原則として見出しの前後および問の直前、科段等に適宜私的に付した。ただし、何れの場合も行頭・行末には付さなかった。
- ⑤補記や訂記は本文に反映して翻刻した。
- ⑥翻刻に使用した各種記号が示す意味は次の通りである。
  - ・「□」↓湮滅(字数が判断できる場合は字数文を入

力し、字数が判断できない場合は「□:□」で示した)  
・「□」↓原本においてスペースのように見え、湮滅痕も確認できないものの、文字のあるべきことが推定される箇所

・「……」↓本文に付された省略符合箇所

⑦引用文については、管見の範囲で確認し得た出典を( )内に割書で示した。

⑧写誤や脱字など、意味が通らない箇所が見られるが、本翻刻では史料性に重点を置き、明らかな誤りと判断できた場合でも特に校訂はしなかった。

### 【本文】

へ一丁右

01 浄土疑芥別申小経部  
善導法事讚

欣浄沙門長西録答以口受書之  
或加私解

02 転経行道願往生浄土法事讚卷上等事 疑云依三業之次

第者可云

03 行道転経如何答三業次第不列必身口意随義不定也今  
転経為面

04 故列口業也 又下卷題行道轉經此依三業次第歟又  
行道者文点如何

05 答如上云只是經事廻道場云行道 又願往生  
者安心起行中

06 何歟答安心也轉經行道者起行故列起行安心歟 又今  
讚者教行二

07 門中明何辺歟答修行門也 奉請四天王直入道場中等事  
08 疑云請四天王有何故歟答為弘法守護也 奉請師子王  
等事

09 疑云請師子王有何要歟答為道場權護也 有衆魔退散德  
故也

10 又師子者為梵語為漢語歟答漢語也新訳云善无畏三蔵  
旧云淨

11 師子又阿闍太子翻師子太子翻无畏太子也此等皆師  
子与无畏

12 一義也故今云漢語也可見執師子国釈西域記也 又師  
子者文点如何答

へ一丁左

01 難知唐本云師子也 又師子者当体譬喩中為何歟答權化  
02 師子也但仏道論衡云師子者云弘法護法神也

03 奮迅身毛衣等事 疑云奮迅者何等歟答師子振身躍  
也毛衣

04 者毛即衣也 衆魔退散去等事 疑云衆魔退散義者四天  
師子

05 中依何力歟答四大理在絶言也今且云師子德也  
06 廻頭請法師等事 疑云廻頭者其相如何答稽首義也  
亦接足

07 作礼義也法師者導師也光記一（俱舍論記、大正蔵卷四一・七頁中）云敬  
礼如是如理師者稽之言至

08 首之言頭亦有就時以己之尊接仏之卑故称敬礼云  
09 直取涅槃城等事 尋云涅槃城者指仏果所証大涅槃歟答  
不爾極樂也

10 序分 娑婆広大火宅无边等事 疑云娑婆与火宅只法

11 譬異也二重釈之有何要歟答法譬互事常習也  
12 六道周居重昏永夜等事 疑云六道与重昏有何別歟答六  
道者所経

〈二丁右〉

01 住処也重昏者所具煩惱也娑婆翻堪忍也 生盲无目等事

疑云生盲与

02 无目有何別歟答生盲即无目也 惠照未期等事 疑云為

能化惠

03 為行者惠歟答行者惠也 又明字或本云期何為正歟答明

為正一歟

04 引導无方等事 疑云无方ナレトモ 文点如何答如上右点付能

化一左点付所化一也

05 託命投神誰之能救等事 疑云託命等之意如何答託命者

生義也投神

06 者死義也 上從海德初際如来等事 疑云海德者為一仏

別名為諸仏

07 通号歟答十住毘婆沙論(卷五、大正藏卷二六・四二頁下)云過去无数劫

有仏一号海德一是諸現在仏皆從彼一

08 夙願寿命无有量光明照无極国土甚清淨聞名定作仏文故

總応

09 同出世仏歟例如寿經所説定光如来云々又指何時云初際

歟答且指一段

10 化儀最初出世仏云初際一歟 設使同生還如覆器等事

疑云同生者其

11 義如何答仏与衆生々値云事也 又覆器者何等歟答如

伏器不住水一

12 吾等身器不入法水一譬也仏善星喻覆器給也

〈二丁左〉

01 苦集相因等事 尋云意如何答苦集者四諦中初二諦也即

生死果生

02 死因也相因者十二因縁也 等輝神光等事 尋云神光者

意如何

03 答如来大般涅槃光入衆生毛孔一内薰密益故漸々善心增

長也弘法

04 大師(秘藏宝論卷上、大正藏卷七七・三六三頁中意)云仏光外射リレハ真如内薰ヨリス

若論依報則超絶十方等事 疑云

05 依報莊嚴上既弁积举有何要歟答上只举極樂莊嚴今积

超絶義一也

06 疑云地上虚空不同也何云无异一歟答今积等皆无漏境界ナル

云事

07 他方凡聖乘願往生等事 疑云乘願者為仏本願為行者願

歟答仏本願也

08 到彼无殊等事 疑云无殊之義如何答生彼者凡聖共得

処不退同発大

09 菩提心云无殊也 欲令識彼莊嚴厭斯苦事等事 疑云

今經中不説

10 苦事如何答説楽事裏可有也 三因三心五念五念行畢命

為期四修等事

11 疑云今經中无三因五念等文何勸之歟答三因者撰発願

五念者撰名

12 号此安心起行也四修者能成方便故必有也 正助四

修則刹那无間等事

〈三丁右〉

01 疑云正助者何等歟答五種正行歟有云正者三心也内因故

也此則能助也

02 助者五念也外因故名助此即所助也故条上三因五念畢

命等歟

03 大衆令坐等事 疑云大衆者召請等外歟答行法聽衆也爾

外也口云

04 □法衆之内三分也召請和讃大衆也 碎身慚謝积迦恩等

事 疑云

05 疑云慚謝之意如何答以慚愧心報謝仏恩也俱舍頌四卷

九・二頁上）云愛敬謂信慚文

06 仏恐衆生四魔障等事 疑云四魔者何等歟答大智疏上

（『觀經義疏』、『大正藏』卷二七・二八三頁下）云魔有四種一五蘊魔

07 二煩惱魔三死魔四天魔是三魔是汝身心唯有天魔是外来

耳又元照『觀經義疏』、『大正藏』卷三七・二八三頁下）云蓋由三

08 アミタ仏有大慈悲力大誓願力大智恵力大三昧力大威徳

力大摧邪力

09 大降魔力天眼遠見力天耳遙聞力他心徹鑑力光明遍照撰

取力有如是

10 等不可思議功德之力豈不能護持念仏之人至臨終時

令障導耶若不為

11 □持者則慈悲力何在若不能降魔障者智恵力三昧力

威神力摧邪

12 力降魔力復何在耶文 直心实行仏来迎等事 尋云直心

者何心歎答

〈三丁左〉

01 至誠心也 本国ミタ等事 疑云本国者意如何答对他方

極楽云本国也

02 ミタ光撰往生人等事 疑云不論念仏諸行ミタ光明撰往

生人歎

03 答撰取必可限念仏也 慇懃□□シテ 智影フモテ 說尊經等事 疑云

文点并意如何

04 答如上意云以慈悲对所化以智恵カクトル影ニ經云事歎 又

或本云慇懃智

05 敬何為正歎答慇懃以智敬經テ說云本吉歎 難思議往生業

双樹

06 林下□生業 難思往生業 等事 疑云三種往生業有何義歎答声

名音曲歎

07 又双樹林者何等歎答双樹者頭涅槃也意云頭極楽无為

涅槃界云事也

08 有大本樹中四枯表苦空无常无我四榮表常楽我淨四徳

也是頭極

09 楽世界四徳莊嚴也又難思議与難思有何差別歎答□声

名音緩

10 急有文字存略歎此即讚極楽无為涅槃界難思議之言也

11 道場時逢難叵遇等事 疑云道場与时歎答爾也又難叵

之差別如何

12 答難約道場叵約時也 眼前業道人□見等事 疑云指

何物云眼前

〈四丁右〉

01 業歎答次下作因縁也此即十惡等□ 道場大衆裏相与トモニ

至心敬礼等事

02 疑云裏相者何等歎答裏者内行法衆也相者外聴聞衆也有

云三業云内

03 外也此義吉也彈指合掌叩頭等事 疑云彈指等相一々

如何答彈

04 指切逼義也合掌恭敬義也叩頭不堪事極時也 或可逢

人逼試皮

05 肉分張等事 疑云今文意依何經論歎答依賢恵經歎此經

十四卷也或

06 五六七卷也賢愚經者仏説ヲ玄奘集也又有涅槃經大論等

又分張之義如何

07 答分肉一張皮云歟 或自割身而延鵠命至乃比若親兒等事

疑云上來所引

08 文出何經論歟答大旨大論六度集經等文也心地觀經序品

(卷一、『大正藏』卷三・二九四頁上)云或於大國為

09 王愛子棄捨身命投於餓虎或尸毘王割身救鵠或救孕捨

鹿王身

10 或於雪山為求半偈而捨全身大方便恩經(卷五、『大正藏』卷三・一四九頁)

中云過去有國王名曰大光

11 明王一切布施敵國王聞心生嫉妬使ハラ門乞王頭為

无上菩提布施頭取意

12 賢愚經(卷一、『大正藏』卷四・三五〇頁上)意云昔有國王名毘楞竭梨王

心好妙法有ハラ門名勞度差告

〈四丁左〉

01 王言我以釘々王身為説法王言我於生死中殺身无数

或為三毒

02 計集スル白骨高於須弥流血喻五湖哭淚多於滄海唐捐

身命

03 未曾為法至乃勞度差説偈曰一切皆无常生者皆有苦諸法空

无生実

04 非我所有文師子菩薩讚(『心地觀經』卷一、『大正藏』卷三・二九五頁下・二九六頁上意)云為

迦摩国慈力王全身施于五夜又又作大

05 国莊嚴王以妻王以妻子施无恪惜昔為六牙白象王

捨身命故投

06 獵者文彼我無殊聖凡何異等事 疑云无殊之義如何答

自他彼无

07 差別云也此等自説已後所作也 又聖凡者指誰人歟答

所化境界也

08 □□起行皆与无漏相应等事 疑云三祇者漏位何云无漏

相应歟答

09 □祇行可感得无漏果報故也 化用不失時機随類变通等

事

10 疑云為限応化身為通他受用□歟答今且積応化身面也

上不背相应身

11 雖報身用也也更常モ積于人□前□變身也 報體則元來不  
動等事

12 疑云報體者三身中報歎答爾也小乘有生□□法身父母  
果縛身生

〈五丁右〉

01 身也無漏五分□身□也又有報身化身一□王宮身報身  
也隨

02 類身化身也 又報即體歎答爾也 三身化用乃至法体无殊  
等事 疑云

03 以法身属化用歎答不爾 修性顯得一切仏皆具三身 雖化  
用云三身化

04 用也報応二身化用推功レ法□用也但真言意ハ四身共云化  
也二教論(卷下、『大正藏』卷)云

05 此四種身具横豎二義 横即自利豎即利他深義更聞文法  
藏云三身无勝

06 劣也果上德故 又立化浄土者是不違同性経説歎答浄  
穢差別約機也

07 故彼同性経約機見二分報化也今釈約仏三身土皆云浄

土歎又只仏所居故云

08 浄土歎又法身如来導群生歎答約事不爾可有内薰利  
益也報応者法

09 身用也 又法体者何等歎答諸仏体也但法体无殊者□諸  
仏不云一体

10 各々諸仏具三身立浄土事等无殊云也例(呼字義、『大正  
藏』卷七七・四  
頁中)如雨足雖多並是一水也報中

11 論三文此為本也 但為凡夫乱想……現在説法等事  
尋云此釈意凡夫乱

12 想他方浄土不可生只極乘許凡夫往生スト 积成歎答不爾  
別不指一方者

〈五丁左〉

01 取捨可乱想故世尊別指一方云意ヲ积也此即十方随願往  
生経釈也亦

02 十住ヒハサ論意也諸師問答亦爾也不及疑慮事也但世  
間料簡有時一義云々

03 其国清浄具四德莊嚴等事 疑云四德者何等歎答常樂我  
浄也真言(『瑜祇経』卷上、『大正藏』卷一八・二五五頁中)云

04 无為而作云々 乃由ミタ因地……証得往生非謬等事

尋云披閱大經一見本

05 願文（卷上、『大正藏卷一・二七二頁中』）云唯除五逆等一何釈以願力五逆

之与十惡罪滅得生等歟答爾也但意云

06 願文雖除一觀經生觀經說願本願所立上之行相一故本願終

可除五逆等一

07 不可說五逆等生ストリヤ探得大意一如此一釈給也此則大願正意

凡夫得益一偏

08 在称名一是以或（『定善義』、『大正藏』卷三七・二六八頁上）云唯明專念ミタ得生一

或（『散善義』、『大正藏』卷三七・二七二頁中）云順彼仏願故一或（『散善義』、『大正藏』卷三七・二七二頁上）云望仏本願一

09 向專称一応知一 尋云今釈小經□相法則一歟何釈大經觀

經□歟答今小經

10 所説往生者翻大經本願力一觀□所説定散往生モ大經本願

力故也大經觀

11 經念仏諸行往生小經証誠可定一也 廻心一念見アミタ

等事 疑云一念者

12 安心起行中何歟答廻心者安心也一念者起行也

（六丁右）

01 高接下讚云高接下請召云等事 疑云下讚□外何云下請

召云歟答

02 讚□□召請シテ法僧云召請也 私云經論章書所釈ニ法体ハ或

初標兼中後一

03 或中標ニ兼初後ハ或後標ハ兼初中ニ而今釈中標ハ兼初後ニ也

謂此上卷内

04 中□□下接高讚云願往生々々願在ミタ会中坐手執香

花常供養一以此一

05 辺也以兼初後一也又此上卷終云下接高讚云願往生

々々々願在ミタ仏前立

06 手執香花常供養高接下讚云願往生々々々願在ミタ会中

坐手執香花常

07 供養□□返一也以此一兼初後一也一反標ル下接高讚云ト更ニ

可唱一返ル二反標ル下

08 接高讚云高接下讚云処可唱二返一故知今一反標高接下

讚云故次下座一

09 高座一返可唱願往生々々々願在ミタ会中坐手執香花常

供養云高接下

六四〇云或燒身或現

10 □云者結前之為也高接下讚召云者生後之句也是次重

07 全身舍利或現散身舍利文句引大論可見云

白道場大衆等也

08 奉請諸菩薩至乃觀音勢至等事 疑云淨業修行道場何先不

11 □□高座先唱ル或下有座先唱ル或或有座后一返唱之処

請觀音

或有下

09 勢至歎答先付至积迦奉請歎又今經同聞衆不举觀音勢至

12 座后二返唱処隨宜付□已下処々上下讚准之可得也

故也

〈六丁左〉

10 又今法僧二宝有何由歎答法僧自利々他德經事顯現法

01 奉請十方乃至八万四千等事 疑云毘尼藏等何不註之歎答

宝只冥

含修多羅藏

11 利益故歎有云開合隨宜歎故下開別讚也

02 □歎是總如來教法云修多羅故也此即總屬別名也論藏

12 歸依奉請者至乃接引无偏等事 疑云□中何殊□歸何之

非仏説者大乘論

由歎

03 許也 又八万四千者何等歎答隨情説教數也 又請全身

〈七丁右〉

散身舍利等事

01 答利他邊依勝故也 又行平等者何等歎答平等接引衆生

04 疑云全身散身舍利差別如何答仏入滅後不荼毘云全身

云行

如多宝等

02 平等也 常作不染身口意業乃至身口意等事 疑云不染

05 恭毘碎身□散身也如积迦等此等相貌或依本誓願或

三業乃至

依遺言也

03 智恵三業者一々其差別如何答不染者持戒三業不退者智

06 又舍利者為法宝攝歎答爾也今积爾也首楞嚴經下大正藏卷一五

恵三

04 業不動者禪定三業常行讚嘆者智者所讚戒也上□戒定惠

三

05 学故智者所讚也清淨者雖貪欲三業也雖慳者雖嘖恚三

業也

06 智惠者雖愚痴三業也覺悟者聞惠也定惠者修惠上行也此

花嚴

07 十種三□中今举七也 又所言三業修行者依何經論說歟

答依花嚴

08 經也人王者轉輪聖王也 一切衆生乃至為勝為上等事 疑

云一切衆生為

09 □等意一々如何答救之護也帰所帰也明々導也尊所尊也

勝々縁勝支也

10 上々首也 又今一々義依何經論歟答宗鏡録二引金剛三

昧經一可見

11 彼二又无量義經有也 転仏法輪成就如来一切種智等事

疑云成

12 就如来一切種智者何号菩薩歟答約横一同如来論堅有

分帰差別也

へ七丁左

01 又仏云一切智菩薩云一切種智常習也 今勸道場衆生

人等々事 疑云

02 衆与人有何別歟答召請和讚衆云道場衆聽衆云人等也

03 龍宮八万四千藏等事 疑云殊拳龍宮所有法宝有何由歟

答依龍

04 □宮殿一辺經卷皆悉留龍宮一故也 龍宮經藏如恒沙等事

疑云龍

05 宮經藏者指八万四千藏云經藏歟答爾也修多羅対法藏等

云故非安置

06 經藏歟 高接下讚云下接高讚云等事 尋云両重讚有何

別一歟答

07 上高接下讚云者次下座高座一反可唱願往生々々々願在

ミ□会中坐

08 手執香花常供養下々接高讚云者即次願往生々々々久住

娑婆常

09 没々等也 全身舍利碎体金剛等事 疑云碎体金剛者何

等歟

10 答碎体即金剛者碎体為衆生也金剛其涅槃堅固德也又碎体

11 与金剛歟答不爾碎体為金剛不碎云金剛也 又或本

碎体舍利

12 何為正歟答□利本為正对全身舍利可云碎身舍利故

へ八丁右

01 大則類同山岳小則比若芥塵等事 疑云理大小形者有何

証拋歟答

02 經說也 近則人天獲報乃至无生剋果等事 疑云舍利近遠

利益出

03 何經論說歟答涅槃經古俱舍論說也其語訳俱舍卷二〇大正二九六頁上意云近則人天遠則仏果文

二九六頁上意

04 私云約結縁衆近則人天獲報約当機衆云遠則浄土等

也

05 高接下讚云下接高讚云等事 尋云両重讚有何別歟答

此亦如前上高

06 接下讚云者高座一反可唱願往生々々願在ミ夕会中坐

手執香花常

07 供養下々接高讚云者即次願往生々々普賢文殊弘誓願等也

08 普賢文殊乃至皆亦然等事 疑云十方仏子何皆如普賢文殊

歟答本 娑

09 婆及十方也例如仏云如釈迦也普賢司 行願文殊司

智恵故成菩薩

10 本也如普賢十願亘一切也 隨機化度断因縁等事 疑

云因縁者何

11 等歟答十二因縁也 无生浄土随人入等事 疑云无生即

浄土歟答爾也

12 又随人入之義如何答随三輩九品之機入云也有云行人

入不行人不入云也

へ八丁左

01 不□□仏人入云也 四種威律常見仏等事 疑云四種

威律者訓誥如何

02 答律者法也習可誥也亦筆也又或本云儀何為正歟答律

本為正也律義

03 之義故也 下接高讚云高接下讚云等事 尋云両重讚有

何別一歎

04 答如前々料簡可知 放大光度有流等事 疑云有流者何等歎答有

05 漏之義也新訳云有漏旧訳云有流亦云有漏也乘光者撰取之義也

06 高接下讚云下接高讚云如前々料簡一 請觀世音一 等事

疑云諸聖衆中

07 別作觀音讚有何意歎答唐土習化他行 必用觀音行也今為化他一

08 故也此我禪一故口伝也 又為請觀音經一讚為請觀世音菩

薩讚歎

09 答請觀世音一讚也但依觀音經一讚意 謂觀忿怒形一 香色乳此等也

10 又有余經意 □ 斂レム容空裏現等事 疑云斂容之義如何

答斂テ本覺

11 □ 撰受形一現 折伏下ハン忿怒七口云也理趣經説觀音隱蓮花血一 此心也

12 又何不云道場現云空裏現歎答爾也但今自空一 來可現道

場一故先

〈九丁右〉

01 云空裏一歎 □ 怒伏魔王等事 疑云觀音忿怒形者容教意歎爾者

02 今我知容教歎答不可知也但聖觀音經意現忿怒形一 意釈

歎天台非

03 行非坐三昧不經諸經一 随意處ニ釈六字六是六觀音一 給ヘリ 此不依密

04 教一也六字畢タラニ 也有云觀音品卅三身意歎 騰身振

法鼓等事

05 疑云騰身之義如何答為現威勢一 動身一也又法鼓者何等歎 答諭説法一歎

06 勇猛現威光等事 疑云勇猛ノ義如何答忿怒形故雄猛義也

花嚴ニハ意

07 云莊嚴身者正法輪身也撰受也變化身者教令輪身也折伏也

08 手中香色乳等事 疑云手中香等者有何証拠歎答請觀音

經一（大正藏卷二〇）云現一 經一（三六頁中意）

09 身作餓鬼手出香色乳飢渴不逼者發菩提心施令得飽滿

光明宝藏等事

又香色者

06 疑云今奉請之義依何經論說歎答花嚴經說也大日大集經

10 何色歎答有云赤色歎 飢餐九定食等事 疑云九定者何

等也

等歎答

07 又香花音樂等一々差別相如何答標量已下事也

11 四〇〇空滅尽定之九次第定歎 声韻合宮商等事 疑

08 一切天人變化莊嚴供養海等事 疑云天与人歎答天即人

云宮商者

也意云菩薩声聞

12 〇〇歎答五韻也今举初二也義寂大經義記云五韻者謂

09 從心出現一切事也而今行者請彼莊嚴欲供養聖衆也

宮商角

又變化者意如何

へ九丁左

10 答声聞平等分心諸事出現云變化也雲者喻也雲集義也

01 徵羽土土之音為宮金之音為商木之音為角火之音為衝

11 隨心變現受用作仏事等事 疑云隨心者為能請心為所請

水之音為羽從

心歎答能請心也

02 五行出五韻也 枝中明実相等事 疑云明者意如何答

12 下接高讚云願往生々々々…常供養等事 尋云更先々

說義也

標量願往生々々々

03 標心運想等事 疑云運想之義如何答上經事諸仏聖衆

へ一〇丁右

供養香花

01 等之言有何由歎答如先々料簡於中間兼初〇〇

04 今心十方法界香花等請道場運供養聖衆之想也例如真

02 待唱梵声尽即坐等事 答梵声者何等歎答下行道說梵偈

言理供養

也

05 等此大乘意也三乘教法相不可云也 奉請十方法界

03 意云梵声者〇清浄声事也謂非世間狂言綺語請諸仏声

至乃

故云梵声也

04 一切恭敬等事 疑云一切者能敬歎所敬歎答所敬ミ夕釈  
迦十方如来等也

05 有云能敬也若所敬可云恭敬一切之故 行道讚梵偈云等  
事 疑云讚梵

06 者何義歎答讚即梵也梵者称美也 散花栴等事 尋云依

何文一歎

07 答五会讚 (卷本、『大正藏』卷  
四七・四七六頁上) 云散花栴文依大般若經散

花品文 過現諸仏等靈等々事

08 疑云此句举仏宝歎答爾也 又靈等者何等歎答云諸仏

靈イツシキ 儀一事也

09 又或本云靈儀何為正一歎答靈儀為正也又何不举僧宝歎  
答略也

10 偏標念仏最為親等事 疑云念仏有三縁何偏云親歎答今

先举初也

11 人能念仏至乃仏知人等事 疑云一此行明何義歎答明親縁

之由一歎 又念与

12 想有何差別歎答鹿細異也念者明記不忘也想者取像為体

也

へ一〇丁左

01 亦心所違別也 私云此義不爾 歎以真観、三縁之积准彼  
案之、今人能念

02 仏々還念者散心也此約三業 如真身観、口常称念等此即  
念仏三

03 昧為宗之意也專心想仏々知人者此約意業、一辺、如真身  
観、衆生

04 憶念仏等、此即観仏三昧為宗、意也意云本願乃至十念々  
仏、中、亘三

05 業、有定散念仏、积頭也余処、称我名号等者此三業、中、散称、  
本願、

06 正意往生、正業偏在之、故积肝要也 一切廻心向安樂等  
事 疑云已

07 下四句明何等義一歎答明近縁也 又廻心者為安心辺為  
起行摂一歎

08 答安心也 行者見已心歡喜等事 疑云已下四句明何等  
義一歎答明増

09上縁也 花開見仏□无為等事 疑□或本云花開 何為

正 歎答花開

10本吉也高接下讚云下接高讚云者如先々料簡也

11聖人所重<sup>至</sup>乃遍体入等事 疑云命者為聖人命為所化衆生

命歎

12答聖人命也 又捨千頭者誰人所行歎答釈迦因行也 又

長釘

へ一一丁右

01遍体入者誰人所行歎答如前上 自取身彼写経傷等事

疑云為誰

02人所行 歎答釈迦因位所行也 千灯炎々<sup>至</sup>乃散花周等事

疑云為何

03菩薩所行歎答釈迦菩薩也有云炎魔菩薩事歎 始服人身

聞正法等事

04疑云服<sup>ウケテ</sup>者文点如何答如上 専心聴法入真門等事 疑

云真門者何等歎

05答浄土也有云仏法也 浄无生<sup>至</sup>乃金剛身等事 疑云為浄

土即无生為浄

06土与无生歎答浄土即无生也 又望何等義云亦歎答浄土

与无生 相对

07云亦也 又无別之義如何答如上云 又生浄土者解脱

之一分何云究竟解脱等歎

08答既叶不退者分有所得故也高接下讚云下接高讚云者

如先々料簡

09自覺心頑<sup>至</sup>乃臥銅車等事 疑云神識与覺心有何別歎答覺

心者第

10六識也神識者第八識分齊也又此如次麁細異也 又神識

闇鈍義何

11依地獄余歎答必可依也 又銅車者何等歎答説觀仏經

(卷五『大正藏』卷一五・六七四頁上)銅車地獄<sup>文</sup>

12天曹地府等事 尋云何等歎答天曹者司<sup>ツカサトル</sup> 天<sup>ツクハシ</sup>神也人間

目 種事也地

へ一一丁左

01府者司地 神也人間府生種事 三十六王地獄典領等事

疑云卅六

02王者何等歎答卅六禽歎天廿八宿地卅六神云爾者地獄

有卅六王一歟

（一九五頁下）云地神曰祇天神曰

03 淨土三昧經八揚經 又地獄典領者何等歟答獄卒等也

04 陰陽道祭文云

（一二丁右）

01 靈文仏法守護權化也 及衆賢聖等事 疑云上請諸声聞

05 謹奉請 天曹具官來下就座 々々々 地府

々々々々々々々々 々々々 北帝

06 々々々々 水官々々々々々々々々 々々々

大王々々々々々々々々 々々々

07 々々々々 五道大王々々々々々々々々 々々々 泰山

府君々々々々々々々々 々々々 司祿

08 々々々々 司命君々々々々々々々々 々々々

君々々々々々々々々 々々々 南斗

09 々々々々 六曹判官々々々々々々々々 々々々

好星君々々々々々々々々 々々々

10 々々々々 北斗七星君々々々々々々々々 々々々 家親

丈人歟々々々々々々々々 云 已上可見

11 陰陽等云雖拳名許<sub>二</sub>未知其体何物云事<sub>云</sub>

弘決第七委如积也

12 天神地神<sub>至一</sub>□靈祇等事 疑云何等歟答弘決二<sub>（大正藏卷四六）</sub>

衆等畢何

02 重云衆賢聖等歟答菩薩大士縁覚声聞外賢聖等歟 披心

懺悔等事

03 疑云披心者其義如何答発露義也 道場衆等内外爾許

多人等事

04 疑云内外者何等歟答行法衆為内聽衆為外也 常起一

切惡相統等事

05 疑云常与相統有何別歟答常者地体惡也相統者刹

那々々起惡也

06 一切惡障<sub>至</sub>聞仏法僧障等事 疑云業障与生死罪障有何

別歟答一切惡

07 障者総標也業障等者別积也謂業障因也報障果也未也煩

惱障因也

08 生死罪障果也本也 又報障与不得見聞仏法僧障有何別

歟答報障

09 者或生辺地<sub>一</sub>或生屋<sub>一</sub>家<sub>一</sub>等也不得見聞等者生惡律儀家  
生障者也

10 是故経言<sub>乃至</sub>寒水地獄等事 疑云指何経歟答同地獄経也

11 仏言阿鼻地獄<sub>乃至</sub>八万由旬等事 疑云仏言者上所引之経

歟答爾也上数今

12 相也 有八万四千重等事 疑云横竖二重中何歟答難知

口云豎重也

へ一二丁左

01 頭如羅刹口口如夜叉口等事 疑云羅刹与夜叉其差別如

何答普

02 門品疏云阿卷疏也〔法華文句〕卷一〇下、〔大  
正藏〕卷三四・一四七頁上)云夜叉翻捷疾鬼、羅刹

翻食人鬼二部是北方所領者<sub>又</sub>

03 有云地行夜叉、教行云羅刹也<sub>云々</sub>有云羅刹中食人生氣、

云夜叉也<sub>云々</sub>

04 如十里車等事 疑云十里車者何等歟答難知但推挙大分

齐一歟

05 又此句結前為生後歟答結前歟喩鉄丸分齐<sub>云</sub>故<sub>云</sub>此

城苦事<sub>乃至</sub>乃苦中苦

06 者等事 疑云八万億千苦者何等歟答上来地獄苦八万億  
千集<sub>云</sub>アヒ地

07 獄重受云也 従アヒ地獄上衝<sub>云々</sub>大海、<sub>云々</sub>焦山下等事 疑

云、<sub>云々</sub>焦山者何等歟

08 答、<sub>云々</sub>焦石異名也 偷劫三宝許染三宝等事 疑云偷劫三

宝義如何

09 答、<sub>云々</sub>偷劫三宝物云事也 又汚染之義如何答於三宝処<sub>云</sub>行

不浄等事也

10 作如是等殺逆罪者等事 疑云逆罪者指五逆、歟答従多

分云也

11 風刀解時等事 尋云意如何答鈔批第五〔行事鈔批〕卷三本、  
六六九頁中意)云言刀風解身者経云臨終也

12 時色黒者定隨地獄色青者墮畜生、色黄者墮餓鬼若如常白

へ一三丁右

01 生於人中倍如常赤白端正者得生天上此必是風刀之相也

02 化閻羅王<sub>乃至</sub>不孝父母等事 疑云化者為權化為反化歟答

反化也次下云

03 作是語已即滅不現<sub>云</sub>故也有云權化也仏説閻羅王授記四

衆逆修往

04 生淨土經（『預修十王生七經』、『正統藏』卷一・四〇八頁上）云經云閻羅天子於未來

世当作作仏名曰普賢如来乃国名

05 花嚴文（『預修十王生七經』、『正統藏』卷一・四〇八頁中）云有二因縁一是住不思

議解脫不動地菩薩為欲授化極樂

06 衆生三現作彼琰魔羅王二為多生習善犯戒故退落琰

魔天中一作

07 大魔王管撰諸鬼科断閻浮提内十惡五逆一切罪人繫閉牢

獄日夜

08 受苦輪転其中一随業報身定生住死又獄種者意如何

答地獄種類也

09 種者玉篇云類也輩也文如是壽命尽一大劫等事 疑云

无問寿量一

10 中劫相違如何答經論異說也 十八苦事一時来迎等事

疑云十八苦

11 事者何等歟答難知可見觀仏經上十八風刀歟

12 具五逆者乃足滿五劫等事 疑云就无問獄寿量上云一大

劫今云五劫相

へ三丁左

01 違如何答毘曇有部意五逆受一度云故具作五逆可云

一中劫今經部成

02 実意五逆云受五劫也又大乘実説云无量劫歟

03 下接高讚云懺悔至心帰命アミタ仏等事 尋云指懺悔

已至心帰命アミタ仏云

04 讚云歟答如先々料簡下接高讚云者可唱願往生々々々

願在ミタ会中坐

05 手執香花常供養之一返畢後可唱懺悔已至心帰命アミ

タ仏也 尋云今指

06 懺悔已至心帰命アミタ仏云下接高讚云歟若爾讚之言

大以不審也如何答

07 唯下卷懺悔之終可云下接高和云若爾讚之言書写之謬

歟

08 四不壞信三業戒等事 疑云四不壞并三業戒者何等歟答

仏法僧上加戒

09 云四不壞也三業戒者□□口撰者身莫犯也大乘義章（卷

一、『大正藏』卷四）云一仏不壞淨二法

10 不壞淨三僧不壞淨四戒不壞淨又俱舍廿五云賢聖品頌

(『大正藏』卷一九  
・二三三頁中)云証淨有

11 四種謂佛法僧戒又旧訳云四不壞淨 十无尽戒声聞戒大

乘戒等事

12 疑云声聞戒大乘戒者何等歟答声聞戒者二百五十戒也大

乘戒者梵

へ一四丁右

01 網瓔珞等十重戒也有云瓔珞等十重者十无尽戒也大乘戒

者三聚淨

02 戒也 又十无尽即菩薩戒也何重云大乘戒等一歟答声聞

戒大乘戒者結上也

03 謂自五戒一至三業戒者結声聞戒也十无尽戒結大乘戒也

04 四重八戒等事 疑云八戒者何等歟答指地持論八重也

普賢經立六重也

05 樂行六貪六弊業等事 疑云六貪者何等歟答色声等六境

歟其二云

06 六貪云六欲也六弊者六度裏也 突於万事不受相

貌也突鼻

07 云辛字也 不知身中有如来仏性障等事 疑云不知身中

仏性者即

08 往生淨土障導歟答全不爾也 貪瞋一切衆生一酒六五辛

等事 疑云

09 文点并意如何答如上意云一切衆生六又所数五辛之食

云事也

10 有云酒言五辛云常名目相從歟 若故作悞作戲笑作愛

憎作等事

11 疑云故作悞作等一々其差別如何答故作者殊結称也已

下可知

12 地獄經云若有衆生作是罪者等事 疑云地獄經者一經別

一名歟答不爾

へ一四丁左

01 觀仏經也從所説法云地獄經也例如説淨土法門云淨

土經

02 風刀解身等事 疑云何經論説歟答如上云 競分其身取

心而食等事

03 疑云取心而食者意如何答心者云中一歟云分其身一故

一々花葉八万四千等事

04 疑云文意如何答難知但罪人身形歟云身如鉄花故

一々葉頭乃在一隔

05 問等事 疑云地獄衆生具支節之相如何答正理論人間人

形如等云アヒ

06 曇婆娑論第七〔大正藏〕卷二云地獄衆生其形云何答曰

其形如人言語云何答曰初生未

07 受苦痛時尽作聖語受苦痛時雖出苦痛声乃至无有一言可

分別

08 者但有打レテ棒壞裂之声文 地獄不大乃至大地獄中等事 疑

云一人身量遍

09 滿獄中者余人隨獄之時是不相障導歟答一人墮時滿城

二三人墮時滿

10 城云也例如隨桶入汨云々 經歷八万四千大劫等事

疑云此地獄壽量

11 一中劫也相違如何答異說也 具五逆罪破壞僧祇等事

疑云五逆

12 之罪外指何罪云破壞僧祇歟答或云上五逆ニハ入破転法輪

今破和

〈一五丁右〉

01 合僧云破壞僧祇也提婆取五百仏弟子破和合相也雖仏

法説五

02 法破転法輪也今開之也或云毀謗尊僧也正理論〔卷四三、大正藏〕

頁下卷二九・五八七云若衆忍許彼所説

03 時名為破僧亦名破法輪故破僧破法一也若爾上破法輪

今破羯磨僧也

04 光十八引婆娑一百一十六〔俱舍論記、大正藏〕云問破

羯磨僧破法輪僧有何差別乎答破羯磨

05 者謂一界内二部僧各々別住作レテ布灑他レ羯磨説戒破法輪

者謂立異師

06 異道如提婆達多言我是大師非沙門喬答摩五法是道

非中喬答摩

07 所説八支聖道上文 今对三宝乃至懺悔即安樂等事 疑云上

一段即明懺悔畢

08 重修懺悔法有何意歟答上举地獄苦果懺悔今举地獄業

因懺悔也

09 又安樂者懺悔滅罪之相歟答爾也律名目也謂懺悔スレハ 即安樂也ト云也四分

10 戒品定寶疏(『四分比丘戒本疏』卷下、『大正藏』卷四〇・四七八頁上意)云欲求清淨者懺

悔セ懺悔則安樂文 不計我惡如草覆地者

11 其義如何答定寶疏(『四分比丘戒本疏』卷下、『大正藏』卷四〇・四八九頁下意)云応与如

草布地当与如草布地文意云茂草覆

12 地ニ時如不見穢ニ以大慈悲草ニ覆藏善罪障穢地ニ給云也所

引文意約大

へ一五丁左

01 衆ニ歟 布施ホトコシテ歡喜ヲ受我懺悔等事 疑云文点并義如何

答如上意以

02 歡喜ニ納受我懺悔ニ云也 已作之罪願滅除未起之罪願不

生等事 疑云

03 文意説何事ニ歟答説四正勤ニ也 願從今日乃至不起忍已

来等事

04 疑云不起忍者何等歟答无生忍異名也旧訳言也大乗義章

第一(『大正藏』卷四四)云

05 不起忍者是七地已上无上忍也文 永斷相統更不敢覆藏

等事

06 疑云罪垢覆藏者有何過失歟答罪增長也 下接高讚云願

往生……

07 高接下讚云願往生……常供養等事 尋云更スレハ先々ニ今兩

重ニ積有何

08 由ニ歟答如最初料簡ニ可有唱一返更又可唱二返ニ故上ニ

誦一

09 返也此ニ返ハ結前也ト可属上文段也